
等身大の呼吸

花倉 小雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
等身大の呼吸

【Nコード】
N1547M

【作者名】
花倉 小雨

【あらすじ】
私立陽月学園高等学校に入学した本条は、なんにも興味を示さない。そんな本条でも自分が所属するクラスは結構居心地の良いものだった。コメディ風味の緩い日常小噺。

えるえいちあーる

桜は幼く淡い桃色を散らせ、人を惑わせる。

そのような幻想的な時間は限りあるのに、花を愛でることなく、人は通りすぎる。

私立陽月学園高等学校、入学式の日だった。

「以上で、私立陽月学園高等学校入学式を終わります。一同、礼

」

厳かな式の終わり。はしゃぐ学生らに紛れ、俺は憂鬱な気持ちで佇んでいた。第一志望は不合格。不本意に来た訳だが、同じ中学の奴らとはクラスが離れてしまう始末。

事実上ひとりぼっち。いいけど。楽しくないに決まっているが。

俺は友達付き合いが苦手だ。たまらない。他人は他人なんだし、誰もが俺に無関心。だから俺も俺に無関心だ。変に関わられると困る。

どうせ俺なんてどうでもよくなるんだから。

これから、多分一年間お世話になる1 - Bの教室。普通科クラスだ。黒板に書かれた座席表をみて、自分の席に着く。本条 瑞季は25番。窓際の一歩前か。何でもいいけど。隣は畑さんらしい。話しかけてこない人だといいな。

ざわつく教室内。隣で畑さんが座ってきた。視界にいないよう窓のそとをぼんやり見る。畑さんは男子のようだ。

暫くして、がらっと教室の扉が開いた。担任とおぼしき厳つい男が入ってきた。皆が静かに席に着く。壇上の男は黒板に名前を書いた。「君たちの担任の大谷弘太郎と言います。担当科目は数学。よろしく。」わりとフランクな先生だった。頼もしい兄貴というところか。

「それじゃ、出席番号1番の朝宮から自己紹介してくれ。名前と出身中学。あと一言。」

お約束の自己紹介。自分の番まで時間がある。寝よう。興味ない。

少し経って肩を叩かれる感覚に目をさます。手の主は隣の席の畑さん。

「…もうすぐお前の番だよ。」

…はじめまして、おはようございます。

「……親切にありがとうございます……。」

正直起こさなくてもよかったが。丁度24番の福山さんの自己紹介が終わったらしい。渋谷席を立つ。

「本条瑞季、南雲中出身。桜の花が綺麗ですね。」

終わり、もういいよね。帰りたい。

俺の自己紹介のあと、少しだけ教室がざわつく。なんですか。間違ってますでしょう？

あの桜になりたいくらいだ。

午前授業の問題

入学式の翌日、つまり今日。だるくてだるくて嫌だったが、片道2時間かかる道のりを耐えて来てやった。

「はいはいそれじゃあ二日目ですが、今日は午前授業です。クラスの係と部活動紹介で終わります。それではまず学級委員を成績優秀者から俺がセレクトしましたー。学期ごとに代わるから、心配しないでいいぞ。」

大変お疲れ様です、学級委員長に任命される人。本条瑞季は寝ますので、起こさないでください。机にうつ伏せて寝る体制をとる。

「そこで寝ようとしている本条、お前学級委員長ね。」

まじですか。物凄く嫌至極なんだが。隣の席の畑くん、代わろう。なんて言えはしないけど。

「わかりました……。」

諦める。成績優秀者だなんてハードルあげないでくれます？第一志望校落ちたので。

「よし、級長は本条に決定。て言うか本条、なんで普通科クラスに居るんだ？特別クラスにいても不思議じゃない成績で。」

「いちやだめなのか？特別クラスって何？購買のパンが無料になるのなら、行きますけど。なんて言う程空気が読めない訳じゃない。ナニヲオツシヤイマスヤラ。って顔を作っておく。」

「お前の試験は全科目満点らしい。まあ、特別クラスは強制じゃないから。」

……。

「それは何かの間違いでしょう、先生。第一志望校落ちたんですよ。」

沈黙の後、口を開く。憂鬱に自ずから溜め息が漏れた。大谷先生は、少し考えて言った。「本条が一体どこ受けたか知らないが、良かった。」

たんじゃないか。俺は、頭いいやつがうちのクラスで良かった。あ、生徒会入りも考えといてくれ。」

さー次、と会話終了。副学級委員長を決めるのだそう。クラス内で二番目に成績の良い生徒を指名した。業務に支障を来すのは忍びないので、名前と顔くらいは覚えてやろうと寝ることなく耳を傾ける。大谷先生が名前を告げた。

「松村夕夜、頼めるか。」

大谷先生が目を向けた方を見る。後ろの席だった。松村というやつは黒髪に眼鏡で、如何にも真面目の権化らしい出で立ち。レンズの奥で切れ長の目が先生を見ている。

「はい。」

大人しいと言うよりも、冷たく返事を返す松村。ああ、関わりたくないタイプだ。こういう奴ほどプライド高くて、俺はよく睨まれるんだ。身も蓋もない。躊躇いなく『ふいんきじゃなくてふんいきだろ。』って注意してくれる人なんだろう。松村がやっぱり睨み付けたので、前を向く。泣きそう。

それから後は聞くともなく聞いていた。いつの間にかチャイムが鳴り、休み時間となった。寝てはいないが、机に伏せていると後ろから背中を撫でられる。ビックリして間抜けな声が出た。後ろを振り返ってみると、松村だっけ？こちらをにらんで言った。

「本条。高校どこ受けたって？」

なんだそんなことが。

「聞いてどうするんですか？」

自虐的に笑いながら問い返す。あ、煽っちゃった？青筋か何かがピクリと動いた。

そっちこそ、特別クラスにでも行けば良かったんじゃない？

「…落ちたのは、篠永東高校。悲しいけど、受験番号書き忘れしました。以上です。」

につこり、なるべく笑顔を心がけて答えた。すぐに真顔に戻す。松

村さん、顔がこわいです。あまり傷口を抉らないで欲しい。

「松村さん、副学級委員よろしくお願いします。正直どうでもいいから。」

最後の一言は余計だと思ったから果てしなく小声で言った。休み時間、ありったけ眠ろう。そう思ってた机に伏せた。

「さーて皆いるかなー。これから体育館で部活動紹介を先輩たちがしてくれるので寝ないで聞くようにしなさいよー特に本条。」
ち、釘を刺されてしまった。興味ないのに。入る気ないし。

「男子はなるべく運動部入るとお得だぞ。履歴書に書けるからな。」
いいよ…。かけなくても。そんなわけで寝ようと思ったのに、体育館に入るや否や騒がしくて寝ちゃいられない。最悪すぎて、ずっとしかめっ面でいたのですた。

「本条くん、具合悪いの？」

然り気無く女子が話しかけてくる。いや、何でもないですよ。そう思っても、声にならない。本気で寝たいんだけど。俺を心配する声のなかに、男も混じっていることに気づく。…おや、気づかなかつた。強いて言えばホスト系の顔がいる。女っぽい顔だな。どうでもよし。

「んん、あ…へいき、ですよ…。」

答えるのがやっと。2時間かけて来たら流石に堪えますな。やつぱり眠い。

暫く、勢いだけの勧誘が続いて座っているだけが辛い。ねむい。寝たい。

ホスト系の男が、先生に内緒で背中を貸してくれるそうだ。甘えてしまおう。

前に座ったホスト君の背中に、頭を預ける。涎垂れちゃったらごめ

ん。

部活動は文化部の紹介になったはずなのに、いやに煩い。主に女子の黄色い悲鳴。思わず目を開ける。起きた様子に気付いたのか、ホスト君が大丈夫？ って顔でみてる。

「ふふ、美術部の先輩がかっこいいから皆興奮しているんだね。」親切にも、騒がしいわけを説明してくれるホスト君。へえ、そう。そんな感想しか出てこない。寧ろそんな視力ないから凄いとしか。見えない、安眠妨害の罪で逮捕したい犯人の顔見えない。皆すごい。…ここにも美形いるけどな。そこの男よりは。

「ああ、あの先輩県内では有名な画家の息子さんなんだ。かっこいいからだけじゃなかったね。」

うーん。かっこいいからだけで騒いでいる、に500円。さあ、ください。500円。

「本条くん、気分はどうか？ 酷いようだったら、先生に言って保健室に行くかい？」

逃げる？ え、ホント？ つい、何度も頷いてしまう。名前知らないけどいい人だな。（ひーいずまいくらすめいと）

ホスト君は嫌な顔ひとつせず、俺を介抱？ しながら先生に一言告げて体育館を後にした。

保健室には、先生もついてきた。保健医も一緒に連れてきている。ブレザーを脱いで保健室の簡易ベッドに横になる。

「本条、もしかして片道2時間のところから来ているのか？」

先生が訊ねた。頷くと、そうか、と先生が考え込む。そして保健室から出ていった。

「本条くん、大丈夫ですか？」

優しく労るホスト君。もう戻って良いのに。彼は俺の頭を撫でた。

「寝れば、だいじょうぶ…ですか、ら。」

毎日5時半になんて起きれるわけない。ああほんとに憂鬱。篠永東
だったら近かったのに。

「本条くん、熱はかる？」

保険医がカーテンから顔を覗かせ、訊いてくる。ホスト君がたてた
人差し指を唇に宛てて、保険医に向かってにつこり笑った。

「おや、寝ちゃった？…脱がせていいかな？」

ワイシャツのボタンを外し、脇下に電子体温計を滑り込ませさせる。
熱なんてないのに。だんだんと、意識は睡魔によって遠退く。

目が覚めると、ホスト君はいなくなってた。時計を見る。12時を
少し過ぎたところ。

「本条くん起きたかな？君少し熱があるからまだ寝てていいけど。」
保険医が声かけてくる。何故起きたとばれた。あの、熱なんてあつ
たんですか。少しだるさがわかったから聞かないけど。

「あの、…彼は？」

代わりにホスト君について訊ねた。

「ああ、田熊くんなら戻ったよ。代わりに松村くんが来るみたいだ
からちよつとまってるね。」

ほう、ホスト君は田熊くんと言うのか。

…はい？ちよつと待って松村くんって言った？

「失礼します。うちの委員長がご迷惑おかけしてすみません。」

がらりと扉が開き、礼儀正しくあの松村が保健室に入ってくる。何
でこいつを寄越すかなあ…。アイシクル松村って呼ぶぞ。

「松村くん、ここちよつとお願いしていいかな？」

頼みの綱の保険医が昼食を食べにいった。置いてかないで…。涙目
の訴えは届くことなく。とうとう二人きりにされてしまった。

「本条、大丈夫か？」

呼ぶな怖い。睨んでやる。アイシクル松村が俺の額に触れる。松村の癖に、心は暖かいのか手が冷たい。ひんやりする。気持ちいい…じゃなくて触るなよ!!

「は、誰に許可を得てこんなに熱くして…いいご身分だな。」

松村の冷たい言葉。酷いことを言われた気がする。でも触れてくる手は優しく俺の首筋に。いや、おかしいって。触っているところおかしいって。

「触らないでっ…!」

声を出そうとしたら、口に指を突っ込まれた。噛みついてやろうとしたけど、指が奥の上を引っ掻く。くすぐったさが全身を駆け巡る。「俺は、こういう風に虐めるのが好きでね…。お前も堕ちてみる?」

やだこいつ、さでいすとさん? 苦しい、苦しいです。逃げないと、危ない領域に足を踏み入れてしまう。学校だと言うのに(上着脱いでるだけだけど)こんな格好で、こんな体制。病人である俺の口に、笑われながら指突っ込まれている状況。…誰がこんな体験すると思ったでしょう。だが甘い! お前の指は俺の口の中だぞ。噛むというダメージを与えてやる!

手首を掴むと、指を軽く甘噛みして油断させておいて…強く噛む。

「…っ、は。いい度胸だ。調教されたいのだな。」

口から引き抜かれる指。ざまあ。

「はあ、挑発的な目で見るな。うっかり虐めなくなるだろ。」

さつきはうつかりで虐めたんだね、ふざけないでください。布団と一緒にかけてた上着を羽織る。

「…先生が来るから、何もしないけど…いつかは満足するまで泣かせてやる。」

さつき俺の口に含んでた指をぺろっと舐めた。この人バカ? うつるよ?

「松村さん…」

端正な顔にかけられた眼鏡を迷うことなく奪う。うわ、壊してやろうと思ったけど、これブランド物か。無理。地味に仕返ししてやる。

視界がぼやけるだけでも、いい気味だし。

「…やれるもんなら、やってみなさい。」

奴のネクタイを力の限り引っ張ってやる。すると、必然的に松村はバランスを崩す。それを利用して、食らってしまえ。

鈍い音が保健室に響く。ついでに俺の悲鳴に近い吐息。そうだった、この技は自分もダメージが。

俺はその時二度とこの『頭突き技』を使わない、封印すると誓った。

午前授業の問題（後書き）

前編終了です。

大谷先生のキャラが確定しないのが目に見えてますね…。

もっと賑やかにしていきたいものです。

午前授業の解答（前書き）

後編です。

先に 午前授業の問題
ひます。

から読んで頂ければなんとか分かります

では、どうぞです。

午前授業の解答

本気でアイシクル松村がキレル瞬間。
寧ろ俺が泣かされそうになる瞬間。
もう既に涙目だったのは内緒。

素敵なタイミングで、保健室の扉が開いた。
松村が俺の上に覆い被さっていて、押し倒しているように見えなくもない、怪しい体制だけだ。…と思っていたら、松村が早急に離れた。キャラを壊したくなかったのだろう。

「本条ー。大丈夫かー？」

担任の声がする。でも足音は二人分？

「瑞季い？」

聞き覚えのある声もするのは気のせいだろうか。この学園に、俺の名前を呼び捨てする人いたっけ？

ひょっこりとカーテンから顔を出したのは、叔父である悠一さんだった。

「まさか本条先生の血縁者とはね。似てなくもないけどなあ。」
続いて、担任が顔を出す。悠一さんと俺を見比べながら。

俺も、まさか悠一さんがここで教えてたとはね。教師なのは知ってたけど。

「大谷せんせ、この度は甥がご迷惑おかけして…。すみませんっ。」
悠一さんが頭を下げる。担任は、謙虚な素振りで苦笑した。
教師同士と言うより、教師と保護者のようなやり取り。

「瑞季、叔父ちゃんち来るかい？それとも寮にいくかい？」
にこやかに訊ねる悠一さん。いくらなんでも人前で叔父ちゃんって

…。

裏表ない人とは言え、子供扱い恥ずかしい。

ん？

「寮って？」

それとなく聞いてみた。すると、担任からパンフレットを渡された。パラ、と捲ってみる。寮費が気になるところ。あまり余計な金、使いたくないし。

「寮費…入寮費7,000円…。月額15,000円…。」

ポツリと呟くと、悠一さんが笑い出した。

「瑞季、早速そこかよ。お母さんに似すぎ。まだ節約の鬼か？」

いや、まあ…。そこまでって訳じゃないけど。俺は決してマザコンじゃないが、相手は親バカなので、いろいろと勝てる気がしない。似てるって、お母さんにすれば誉め言葉だから喜んで喜ぶだろうな。はあ…。

「…俺に対しては、女神ってところですかね。」

ちよつと作り笑い。知らない人の手前、下手に素が出せない。俺は人見知りなんです、これでも。

「じゃ、叔父さんと暮らすか！瑞季の手料理」

「…っ！！」

悠一さんが言わなくていいこと言うから、慌てて彼の口を塞ぐ。しまった。なんかもう、どうでもいい。

目の前に他人。泣きたい。

うわ、二人とも驚いてるよ。恥ずかしい。

「…先生方？すみません、席をはずして居りまして。」
その気まずい状況を打ち破ってくれたのは、他でもない保険医だった。

性別年齢不詳。さつきは退室すると言う非情な悪魔のように思えた保険医。

今や仏様の勢いです。

ここに仏壇とか、冗談じゃないけどね。

「松村、帰っていいぞ。」

便乗して担任が口を開く

「…はい、それでは失礼します。」

丁寧にお辞儀して、出ていけ松村。…じゃなくて、出ていく松村。そのとき一瞬、さでいすていくスマイルを浮かべたのを、俺は見逃さなかった。

まるで『素性をばらしたら泣かす。』とでもいつてるかのように。

つい目線を外したのは言うまでもない。

「瑞季…。僕の家じゃダメかな？泊まったことだってあるだろう？心配しなくていいから。瑞季なら喜んで養うよ。」

悠一さんがしゃがんで頭を撫でてくる。うん、確実に生徒としてじやなく、可愛い甥っ子として接してるな、悠一さんってば。

…この人も、親バカになるんだろうな。子供がいたとしたら、結婚しないのかな。もう四十路になるだろうに。言わないけど。

「悠一さん、お世話になります。」

ベッドの上で手についてお辞儀。

苦笑して、悠一さんもつられてお辞儀。

「こちらこそ、よろしく願います。」

担任は空気を読んだのか、保険医のところへ行っていた。

悠一さんの車の中。仮にもびよーにんらしいので、実家まで送ってもらった。

「ここだけの話、瑞季を独り占めできるかなあと思ってさ。瑞季料理上手だから、百合子が羨ましくって。あ、孝彦さんは無理してない？てか帰ってきてる？妹の旦那の愚痴きく僕の身にもなってほしいよっ。」

悠一さんの表情がコロコロ変わって面白い。特に何でもない会話に、自然と顔が綻ぶ。

「ふふ、瑞季やつと笑った。さっきは他人の前だったから、なんか嘘っぽい笑い方だったでしょ。」

叔父ちゃんにはお見通しって、悠一さんらしいね。

「…うん。悠一さんには敵いませんね。」

微笑み返したあと、俺の携帯電話に電話着信。発信先は母。

受話器ボタンをおすと、直ぐに母のかしこしい声が聞こえる。

『瑞季っ！もー心配したあ！瑞季、叔父さんと住むんだって？…瑞季がそうしたいなら、叔父さんとこにいてもいいけど…。うっとおしかったら、いつでも入寮しなさいっ！お金はだいじょぶだから！で、今帰って来てるのよね。支度しとくから気をつけて帰ってらっしゃい。』

ふう、と電話越しにため息が聞こえた。

熟、母と悠一さんは似てないと思った。

「わかったわかった、うん。じゃあね。」

若干軽くあしらうようにパワーボタンを押して通話終了。

許可、いつの間におりてたんだ。悠一さんかな？まあ手間が省けて良かった。

そのまま自宅へと向かい、悠一さんは母から説教じみた小言に付き合わされていた。

久しぶりの悠一さんの家。独身なのに一戸建て。ローンも完済らしいから驚きだ。

「瑞季の部屋はここ使って。あ、なんにも使ってなかったら掃除滅多にしてないけど。そうそう、ベッドは注文したばかりだから、とりあえずは布団で寝て。」

通された部屋は空っぽだった。少し埃っぽいところだけど、割りと広い。10畳位はあるかな。何て贅沢。

「悠一さんありがとうございます。甘えさせてもらいます。」

居候だからたくさん働こう、彼のためにも。料理がどうか言うてたし。

「…瑞季、そろそろ夕方だし買い物行く？叔父さん、瑞季の料理食べたいっ！」

全く相変わらず大食漢だな。子供みたいな言動に、思わず笑みがこぼれる。

「はい、行きましょう。」

いやあ、兄がいたらこんなもんか？

ちょっと、うん。甘えっ子な気もするけど、こういうのもいいよね。

夕食は、悠一さんの希望で中華料理でしたとさ。

午前授業の解答（後書き）

はい、後編でした。如何でしたでしょうか。

登場人物にモデルは居たり居なかったり。

因みに主人公は某そふとーくボイスのキャラをイメージして喋らせてます。

どうでもいいですね。

山田太郎さんにはお会いしたことがない（前書き）

書き方変わってます。

違和感感じるかも知れません。

山田太郎さんにはお会いしたことがない

そんなわけで、叔父の悠一さんとお世話になっている本条です。すごい楽です。

1日だけとはいえ、自転車で1時間、更にバスで50分、降りたところからだいたい10分、よりも車で20分の方がすごい楽です。今思えば、電車とか使えば良かったんですが、どうやら駅からだと違う方向のバスしか時間が合わないそう。母情報です。

さて、いい加減クラスメイトの名前を覚えなければならぬようです。

生徒数、31名。

顔と名前を覚えた人、3人。

俺の興味ある人は覚えてあげるけどなあ…。

朝のホームルーム。

学級名簿の文字の羅列を睨みながら、欠伸をひとつ。

大谷先生が来ないから代わりに出欠をとる。生徒は鉛筆とか消せるもので記入。

全体を見回すけど、席についてないのは俺と…

………9番、吉良…誉？

わかんないけど、取り敢えず遅刻扱いにしておこう。

アイシクルもついでに遅刻とか欠席とかにしてやりたかったけど、

あとが怖いから止めておこう。

松村の席の前でそいつに呼び掛ける。

「ま・つ・む・ら・くん。じゃんけんしてください。」

あからさまに嫌そうな顔をあげる松村。

職員室に先生を呼びにいく係を決めるって言ったら松村が席をたった

「行く。本条、分かってるよな?」

ばらしたら…?

って言っちゃばらしてるようなもんだし、違うことかな。

「はいはい、お留守番ですね。任せていつてらっしゃい。」

悟られぬよう笑顔で手を振る。

半ば強引に。

「ちよつとそこの新婚さん。吉良ちゃんもうすぐ来るってよ。」

ムードメイカーな女子生徒がおどけたように言う。まわりから、ちらほらと笑い声が聞こえてきた。新婚だなんてそんな殺生な。

嫌そうな顔するけど、必死に否定すると逆に怪しまれるからなにとも言えない。

相手がアイシクルなのが癪に障りまくって仕方ないけど我慢。松村が口を開いた。良いぞ言ってやれ。

「ご期待にお答えして。」

な

「なにを…。」

「行ってきます。」

不意打ち。

してやられました。

女子の黄色い悲鳴が聞こえます。

やりやがりました、きす。

よりにもよって唇。

アイシクル松村、そのまま帰ってくるな。

体が硬直して動かない。

泣きそう。大嫌いな男にされたとか最悪。

「本条くん、大丈夫かい…？」

声をかけてきてくれたのは、田熊君。

顔はふざけているのかと思うぐらい女みただけど優しい。
いや寧ろお母さんみたいな。

「う、えう…。ごめんなさい。だいじょうぶです。」

ちょっと、いやかなり間抜けだろうな。

元凶の女子生徒が遠くからごめんとかいろいろ声をかけてきたけど、よく聞こえないから適当に流した。

田熊君、お礼にメールアドレス教えてあげてもいいよ。
本当は誰にも教えないことにしてるけど。

まあ今はいいか。その時ゆつくりと教室のドアが開いているのが目に留まった。

アイシクル？と思ったが、違う人だ。

「…きらです…。遅れました…。」

顔を半分くらい覗かせて、こっちを見ている吉良くん。
入ってこないのかな？ああ、先生を警戒しているのか。

と思っていたら、吉良くんが手招きをしている。後ろを振り返っても誰も居らず、俺自身を指差すと吉良くんが何度か頷いた。

あ、俺を呼んだのか。

ドアの方まで近寄る。

「どうされました、先生いませんよ？」

入ってくる様子がない。吉良くんは気まずそうに俯いている。

「…そ、…ってもらえま…せんか…？」

聞こえない、何て言ったの？

彼に目線を合わせて問う。

「も1回言って下さい。」

吉良くんは顔を少しあげた。うわあ、こいつも美形側の人間だ。性格はちょっとネガティブとその界隈の人にしちゃ珍しいけど。

心のなかでだけと言っとくぞ。

泣くなよ。

暫くして吉良くんの唇が微かに動いた。

合わせた目線は、若干左下に逸らされていた。

「…相談に…のって、貰えませんか…？」

やっとなんて聞いた。

相談にのって欲しい、と。こういう事だね？

「…構いませんけど、教室に入りましょう？副学級委員が先生を呼びに行ってますし、そのうち戻って来るでしょうから。」

本当は戻って来てほしくないけど、なるべく穏やかを装おう。

吉良くんは、副学級委員という言葉にわずかに反応した。

気のせいかもしれないが、アイシクルが苦手と見た。

吉良くんを教室に入るよう促して扉を閉めた、けどすぐ開いた。アイシクル…！

「…なんだ、その構え。」

松村に言われた構えというのは、ただ単に驚いたポーズだけど。

まあ、格闘風に見えなくもないか。

この間合いなら、一発くらい殴れるかな。

いや、やっぱりやめておこう

関わるだけ無駄だろう。

「まあいい。本条、先生は暫くいらっしやらない。ご家族に不幸があり、宮崎の実家に戻られたそうだ。」

淡々としやべる松村を怯えた目で見ている吉良くん。宛ら小動物のよう。

気付いているのかいないのか知らないが、ちょっとご機嫌で、松村は話を続けた。

「SHRは俺とお前でやる。授業変更で副担が一時間目にくる。わかったか？」

仁王立ちで話を締めた。

偉そうに何を褒めて欲しいの？

「ワカリマシタ」

棒読みで返答した。俺とお前ってなんだよ。凄いい呪いの言葉に聞こえる。

早く鳴ってください、チャイムさん。

「…という訳です。そのまま静かに待機しておいてください。」

結局最後だけ言った。

殆ど松村が指揮を執り、俺は楽にすんだ。
ちよつとだけだからな、頼もしく思ったの。

席について少しして、漸くチャイムがなった。副担との初のご対面。
たぶん滅多に出番のない人。名前もモブでいいや。

がら、と音をたてて教室の引き戸が開く。その方に目をやると、品の良い華奢な人物が現れた。
言葉にするのなら王子様と言ったところか。髪は黒いけど。身嗜みがそんな感じ。

「皆さんはじめまして。英語担当の藤川です。えーと、松村くんかな。彼の説明した通り、今日は訳あって大谷先生がご不在です。3日程で戻られるそうです。その間、私が朝と帰りのHRを行いますのでよろしくお願いします。」

につこりと微笑んだ藤川先生。
なんかごめんなさい。

…男性だとばかり思っていました。

声でわかった。女性だ、この先生。
あまり言うに変態さんに思われるが…。
胸は辛うじてあることがわかる程度。

初見さんは男性だと思うだろう…。
ボーイッシュどころじゃないもん。
最早ジェントルマンだもん。

田熊くんの逆バージョンかな。
英語は苦手じゃないから敵ではないね。

そんなこんなでお昼休み。
教卓から教室を見渡す。

女子らは藤川先生の話ばかりだ。
例えば出席番号1番と2番。
朝宮小春さんと？入江優叶さ…え、なんて読むんだこれ。もう、覚えられない。
出席簿でカンニングしてる。

「小春はどー思う？」

「うちはゆかながええけん…。」

「小春…。可愛いこと言ってくれるね。」

…彼女らは例外みたいだね。二人の世界にご到着しました。
というかこれゆかなって読むのか。
メモしとこ…。

制服のポケットから、手帳とボールペンを取り出す。
数的には都道府県とか県庁所在地とかより少ないんだから記憶できる筈なんだけど。
如何せんあまり興味が…ないんだよなあ。

「あ、の…委員長…。いいですか…？」

などと考えていると、その具体例がいらっしゃいました。名前なんだっけ。

さりげなく出席簿で“遅刻”の印がされている名前を確認。

ああ、吉良くんね。おっけおっけ。

「はいどうぞ。ご相談とは？」

目立つのは避けたくて、教卓から離れる。
そのまま俺の席に吉良くんを座らせた。
みんな騒がしいから、大丈夫だろう。

「……俺っ……学校……やめたいです……。怖いんです……。嫌われちゃうのが……。」

切り出したかと思うと、目に涙を溜めて
袖からちよつと出した手で口を覆った。
泣くの？止めて、泣かないで。
アイシクルと違って泣かせる趣味なんてない。

「嫌われるの嫌でも、学校辞めるのは飛躍しすぎですよ。誰に嫌われたくないんですか？」

ここは田熊くんを見倣おう。
頭なでなで、しながらいった。

「……皆、だけど。特に松村くんに嫌われたくないです……。」
ほい？

え、何この子。大物だな。

「俺、松村くんのこと好きです…。すごく好きなんです…。」

震えながら、繰り返した吉良くん。純粹なんだ。松村も罪作りの男だな。

…ちょっと待て、後ろ松村いない？

いる。すごい凝視してる。顔がちょっと間抜けで面白い。

「……気持ち悪いですよね…？男が男を好きなんて…。それに俺、……えっちいこと好きで、いけないこと考えちゃうから誰にも打ち明けられなくて…。」

後半は小声で言ったため松村には聞こえてない、多分。

で、当の松村はというと、肘ついた右手に顎のせて眉間に皺寄せて睨んでる。俺を。

「…打ち明けるのに勇気が入りましたね…。大丈夫です、俺は吉良くんを応援しますよ！」

笑顔をわざと松村に見せつけるようにオーバーにしてやった。松村がなんか言いたげだったけど無視しといた。

「ありがと…。瑞季って呼んでいい？」

ちょっとはにかんで笑う吉良くん。

彼は俺をアイシクル松村から引き離してくれるかもしれない。親しくして損はないよね！

酷いかもしれないけど、下心があつてごめんね！

「ええ、構いませんよ。」

笑つて言つた。

ふと松村の方に目をやると、赤いボールペンで

『後で連れ出してやる。』

と書いたルーズリーフを俺に見せていた。

俺は適当に笑顔で首を傾げておいた。

そんなことがあつた放課後。

アイシクルに連れ出された俺は、気がつくやうに体育館の裏という不穏な場所にいた。

「…本条。」

「なんですか。」

アイシクルの言葉に、間髪なしに答えようと思う。

アイシクルは、俺を逃がさないように壁に押し付けてる。それと顔に近いです。

アイシクルが口を開いた。

「お前の態度が気に入らない。」

はあ、そうですか。

「あなたのために泣いてあげます。だから吉良くんと俺のために、吉良くんの気持ちに応えてあげてください。」

身長、負けてるような気がする。

吉良くんとは同じ位だったと思うけど。

「いやだ。俺はお前以外の男に興味ない。お前を俺なしじゃダメでくらいにチヨウキョウしたい。」

…アイシクル松村から、ヘンタイ松村に変えようかな…。
俺の腰を無断で引き寄せない、そこ。

「なんで俺なんですか？」

その矛先を、吉良くんに向ければ事は丸く収まるのに。
ちよつと、なんで俺のネクタイ緩めてるわけ？

「一目惚れ。」

米の話はしてねえよ。

そしてそんなに顔近づけるな。

「意味がわかりません。」

アイシクルの肩を思いつき押し返す。

無理だ。もうやだ。

しかし泣きはしない。泣いたら負けだろう。

「松村くん、吉良くんじゃいやですか？吉良くんの方がいいですよ！俺では楽しくないです、こんなことしても。」

肩に置いた手をそのままにして、訴える。松村が笑みをこぼした。

「何いつても無駄。吉良に何言ったか知らないけど、俺はお前がいい。」

このひとも笑うんですね。
でも、優しさとか感じないのは不思議だ。

そんなに俺がいいなんてふざけてる。
騙されるもんか。

二度とあんなこと繰り返したくない。

そう思っていると、いつの間にか涙を流していたようだ。
松村の驚いた顔がちよつと落ち着いて、頬を拭われる感覚を覚える。

喉の奥と、

こころって言うのかな…

胸がじんわり痛んだ。

つぎ、溢れたら止まもないかも。
目の前の男を傷付ける。
そんな気がする。

「……吉良くん気持ち、わかるから……。人ってね、いつかい裏切られただけで怒る人と……不安になっちゃう人がいるんだよ。多分、吉良くんは不安になっちゃう人。」

裏切られて嫌われて……他人どころか自分まで信じられない、俺みたいになつて欲しくない。……わかつて……。？」

ちゃんと笑つて言えたかな。

お前に泣かされたことにしといてやる。

お前が望んだことだろう。

なんで困つた顔してんだよ。

「……ごめん。本条、いくら拒絶されても……俺はお前が欲しいから。でも、嫌われたくないって思ったし。無理強いはいしない。吉良のことも、考えとく。……泣かせたいってのは、こういうことじゃないから。」

松村なのに松村じゃないみたい。
いつものさでいはどこ？

「本条は俺だけの前で素を出してくれよ。今はそれで我慢するから。」

松村は耳許で囁いた後、ゆっくりと俺から離れていった。

「瑞季って呼ばれるのと、ハニーって呼ばれるの、どっちがいい？」

「本条で。」

「瑞季な。」

ネクタイを整え、松村を睨んだ。

眼鏡の縁に指を添え、緩く笑う松村。

ご機嫌な態度。

「じゃ、バイバイ。アイシクル松村。」

なんか苛ついたから、捨て台詞を笑顔で吐いて逃げ帰る。
アイシクル、をやや強調して。

ちら、と振り返ったけど、

松村はそのまま俺を見ているようだった。

「…アイシクルって、なんだよ…。」

ぽつりと呟いた松村の独り言は、風に紛れて聞こえなかった。

山田太郎さんにはお会いしたことがない（後書き）

…主人公のキャラが当初と比べると大分違ってますね。
さぶたいとるてきとつです。

LまでP距離あります。(前書き)

懺悔はあとに書くとして

人権的にアレな表現ですので一応注意。

まあ勘違いって伏線ですので軽く捉えて下さいな。

主人公のクラスキャラ全員考えるほどの暇人っぷりを発揮したけど、
中の人はN L 苦手な特異な生物なんで全員はきつと出てこないでし
よう、そんな独り言。

…ではどうぞ。

ＬまでP距離あります。

「委員長ー、田熊あー。料理って得意？」

大谷先生が戻られて暫く経ったある日の昼休みの事。

田熊くんを誘うことに成功した俺と、俺に誘われてお昼ご飯と一緒に食べようとする田熊くんは、クラスの男子に声をかけられた。

名前なんだっけ。関わるのははじめてかな。失礼だけどじろじろ見てやった。

俺より5cmほど高い身長。センター分けしたほんのりと明るい色の髪。黒々としたやや大きなつり目。羨ましい、男前だ。

そんな俺を見た田熊くんが苦笑してこっさり名前を教えてくれた。

「彼は東雲瑛くんだよ。南雲雅史くんの隣の席の。」

南雲くんは分かるよ。南雲くんは授業中ずっと寝てる眼鏡の人がつしりした体格のおかつぱの人。近くで見たことないけど、顔立ちはいじめっ子風だった。

「南雲と東雲…隣同士なんて運命か何かですか？」

深く意味を考えずに口にしたら、聞いていたらしい東雲くんがきよとんとしたあと、へらへら笑った。

「運命じゃなくて、雅史さんが仕組んだんだよ。」

え！？

雅史さんって、南雲くん？

流石の田熊くんさえ、驚愕を隠せない様子。

「お、お二人は…どういう関係で…？」

気を取り直した田熊くんが訊ねた。

東雲くんは、少し考えてから田熊くんの耳許で、何かを囁いた。
みるみるうちに田熊くんの顔が歪んでいく。信じられない、とても
いうように。

「何が気に入らないのか、雅史さんは言いたがらないけど。田熊は
大人っぽいから言っても大丈夫だよな？委員長には言わない」

茶目つ気たつぷりに笑うと、田熊くんもつられて苦笑。何それ、子
ども扱い！？

「俺子どもじゃないです！」

そりやこの3人の中じゃ小さいかも知れないけど！いつか悠一さん
の身長だつて抜くんだもん、お父さんおっきいからっ！

「ありゃあ、拗ねた。んー、まあいいかなあ？……あのさ、雅史さ
んは命の恩人で、何でも言うこときくって言ったらペットにされち
やった。そんなわけで、あの人には逆らえないんだ。……そうそう、
二人とも料理上手なんですよ？料理教えて！」

まるで簡単なわがままをかなえてあげたかのように、あっさりした
口調で言つてのける東雲くん。
ペットですか！？

「ペットの命の恩人…？？ え？」

混乱していると、ふう、と溜め息をついた東雲くんが少し屈んで、首に下げているらしいペンダントを取り出すと、俺に見せた。

“master：南雲雅史”

シンプルにそれだけ書かれた銀色の四角いプレート。もしや首輪つてやつか。

…人権蹂躪じゃないかこれ。

悟った顔でもしてたのか、東雲くんはそれをまた服の下に隠した。

「雅史さん家は確かに一癖あるけど、結構待遇いいんだよ。…まさかここまで好かれているとは思わなかったけど。」

はにかんだ笑顔で、南雲くんは視線を向ける東雲くん。一体何があったか、俺は知る由もない。

「とにかく、本格的に料理出来ないと雅史さんに飽きられちゃうから…。一週間くらいご鞭撻を！」

またかなりの短期集中な…。

料理は褒められて、長所にしてくれてたことで。人に教えられる程じゃないんだけどな。田熊くんは調理部に入ったから頼れるだろうけど。

「僕は家庭料理くらいしか出来ないよ。必要に迫られてやってたから。部活は？」

さりげなく入部を勧める大物田熊くん。

しかし、東雲くんは苦笑して掌を左右に振った。

「禁止されるから、無断外泊もこれから。」

厳しい、世界だな。

それでもペットでいるなんて、そんなに魅力あるのか。

田熊くんは、若干拳動不審で何か言いたげ。

「…一緒に住んでる？」

小さな声で田熊くんが訊ねると、東雲くんは首をかしげて不思議そうな顔をした。

「ただだけど、もうすぐだし？なんで？飼われてるんだから一緒に住むでしょ？」

これをきいた田熊くんは困った顔を両手で覆い隠した。

（本人が解ってない…。そっちのペットじゃないよ多分！）

そのまま深呼吸すると、心の旅から田熊くんが帰ってきた。穏やかに笑ってるけど、惴ねているようにもみえる。

「分かった、引き受けよう。…本条くんも折角だし手伝ってね。僕だけじゃ不安だから。」

「…え、はい。」

田熊くんが俺に話しかけた声に元気がなかった気がするのなぜだろう。

引き受けちゃって大丈夫なの？

「うわ、時間ない！」

教室の壁にかけられていた時計を見た田熊くんが咄嗟に言った。

「え、うそ。まだ食べてないですよ！？」

そういえばお弁当食べる場所だったんだ。どうしよう。東雲くんが平謝りしだした。

「本条くん、しょうがないから次のお昼休みに食べようか…。僕は1限くらい平気だけど、大丈夫？」

「……今朝ご機嫌な悠一さんから貰ったちくわなら…。」

ついでに魚肉ソーセージとかチーズかまぼことか、棒的なおつまみを大量に。

でもここでそれ食べるのは気恥ずかしいってやつですよ。

しかしね、田熊お母さんがお腹空いたなら食べなさい、って言うちゃいましたよ。

席に戻り、田熊お母さんの励ましを受け、腹持ちの良さそうな魚肉ソーセージを取り出す。次の授業……悠一さんじゃん…。序でに東雲くんの料理の試食でも頼もうかな。

袋を開け、独特なフィルムを割くと桃色のふんわりしたボディーが現れる。

そいつを口に入れようとした瞬間、視線を感じた。

「……………」

目の前に、ギラギラ光る目が2つ。机に揃えられた手、くるくるの猫っ毛。

ああ。人か。一瞬怖かったよ。夢にも出てくるかと思った。

しかし誰だろう。

どこかで見たような。なんか似てる。

その子は魚肉ソーセージを凝視している。欲しいのかな？開けたやつあげられないし。……ちくわ食べるかな。

ちくわを取り出して目の前に置くと、ちくわにちらりと目を遣って今度は俺を見た。

かなり大きい瞳なんです、乾かないんでしょうか。こぼれ落ちたりしませんよね。

何故か、目を合わせていられなくなって、少し逸らしてみる。すると、目の前の手が伸びて、ちくわを掴んだ。

なおも俺のようすを窺いながら、ちくわの袋を開けてその場でほおばりはじめた。

何かに似てる。

猫だ。（猫大好き）

かわいい。猫みたいな人このクラスにいたっけ？かわいい。いいなあ猫。

この子悠一さん家で飼えないかな。

…飼いたい欲求ってこういうことか！

なんとなく分かったような、分かんないような。東雲くんはかわいいってことか。

人それぞれだからなんとも言えないけど。

妙にスッキリしたので、改めて魚肉ソーセージを口に運んだ。

その日の放課後。また同じ場所に集まって、3人で唸ってた。

「それじゃ、問題はまずどこでするかっでことだね。調理室は貸してくれないし、僕の家は無理だ。本条くんのところは、先生に訊かないとでしょ？」

上手く仕切ってくれる田熊くん。
その問いかけに、俺は頷いた。

「俺んち遠いし、多分効率悪い。」

と東雲くん。実家のこと言ってるよね。
どうするつもりだ。

「…雅史さんが16歳になったら、二人暮らしになるから、タイムリミットは今月の29日。いけると思う?」

少し不安そうに田熊くんに訊ねる東雲くん。田熊くんはにっこり笑って頷いた。

「そんだけあれば、あとはやる気次第だよ。南雲くんに美味しいご飯食べさせてあげるんでしょ?」

それをきいて、恥ずかしいのか悲しいのか、形容し難い表情で頷いた東雲くん。

流石です、田熊お母さん。

「いま残っている人に、家のキッチン使わせて貰えないか訊いてみる？」

かつこいいよ、田熊くん。

人の為にそこまで尽くせるなんて、きつと君はいいお母さんになるよ。

いや無理ですよね。

しかし、残っている人って…。

松村、女子数名、隅っここの人間（よく見えないけど多分吉良くん）、床に横たわる物体…。

あれだ、みんな暇なんだ。

近くの松村に声かけにいった田熊くん。度胸あるなあ。ぼんやり見てたら、東雲くんが俺に話しかけてきた。

「…委員長ってあいつとちゅーしてたよね。あのあと泣いてたけど嫌だったの？」

あいつって、松村か。てか覚えてたのか。せつかく忘れてたのに。

「…だって、恥ずかしかったですから。松村嫌いだし。あの人変態ですよ。」

俺の泣き顔や悶えている顔が好きらしいし。
そついうのはね、されて喜ぶ人にしないと。吉良くんとか！

「…愛されて羨ましく思っただけだな。」

苦笑して、独り言のように呟いた東雲くん。少し悲しそうな声音だった。

田熊くんが頭を抱えて戻ってきた。
難しい顔している。

「…本条くん、彼は止めとこうか。使用条件が君の手料理食べたい
つて。」

深刻な話かと思えば、変態のわがままか。
しかしそれくらいの犠牲で済むなら喜んで。

「構いません。それくらいなら普通です。」

田熊くんも頑張ってる。俺も頑張らねば。

「悪いね、ありがとう。（普通…？）」

東雲くんは、うるうるしながら微笑んだ。
きっと彼のこつという所が気に入って、南雲くんは飼いたいって思っ
たんだろうな。

「二人とも、ホントにありがとうっ…！」

複雑な人だ。

多分、東雲くんは凄く南雲くんの事が好きなんだ。ここまで尽くせるんだから。

でも、南雲くんは“飼いたい”。

人権的に有り得ないけど、愛であるといいなあ。

「……松村、手料理って何がいの…？あ、………な、何を作ればいいか困るだけであって、お前の食べたいものを作る訳じゃないからな…。」

俺達は二組に分かれて調理することになった。松村と俺、東雲くと田熊くん。

やだあああああ…。

というか、なぜ混ざる松村。

”面白そうだから”ってお前、キッチン借りたらもれなく松村夕夜オプシオンはないでしょ！？

………とにかくにも現在食材調達中。心のオアシスとは別行動。呉越同舟中。

俺を含む四人は近くのスーパーに来ていた。

「そうか、うん。…あの条件なんて、お前と一緒にいるための口実なんだけどな。…ダメ元だったし、作ってくれるってだけで嬉しいな。………ありがとう。」

先程の問いかけの答えは意外なものだった。う、調子狂います。ばかなの？

「……あ、ありがとうなんて料理ないよっ！ばかあ！」

照れ臭くなって、何言ってんのか分かんないまま、俺は松村から距離をおいた。因みにスーパーのかごを持っているのは俺だから、単独行動は出来るって言う寸法だ。なかなかいい作戦だと思う。

「…瑞季、ありがとうって料理がないのなら、お前が作ればいい。料理得意なんだろう？」

追い付いた松村が背後からそう言った。

不思議と嫌ではなかった。

でももうちょっとおどけてくれると助かったんだけど。

普通に感動してしまったんだ、ありがとうって料理に想像力を掻き立てられ、真剣に考えてしまうほど。

言い出したのは自分だったはずだ。

頭の隅では分かってる。

苦手だと言う男に作ればいいと言われただけ。

誰かに頼まれた、それだけ。

「…これだけじゃ、きつとまだ曖昧だ。…松村、協力してくれる？」

何かいいこと思いついた気がする…。」

振り返ってそいつにいった。

驚いたような、訳のわからないような顔。
でもすぐにいたずらっぽく笑って

「いいよ。」

頷いた。

LまでP距離あります。（後書き）

はい、ごめんなさい。続きます。

最後無理矢理でしたね。

国語力とかセンス皆無ですみません。

おつまみ棒的なものですみません。

ちよろつとネタバレしちゃうと

ちくわの猫似の人は横たわってる物体で、名前は藤田って言います。

キャラ紹介に需要あるかどうか聞きたいけど、そんなにキャラもないので保留にでもしときます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、^{たんのう}堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1547m/>

等身大の呼吸

2010年10月9日13時45分発行